

「戦争」と女性

——齊邦媛『巨流河』・林白『たったひとりの戦争』を例に——

“War” and Women—Case Study of Chi Pang-yuan’s *Chüliuhé*

and Lin Bai’s *One Person’s War*—

池上 貞子

Sadako IKEGAMI

梗概

筆者最近有机会翻译出版台湾的学者齊邦媛(1924-)写的《巨流河》和大陆的作家林白(1958-)写的《一个人的战争》，两本书都是所谓女性书写。在《巨流河》之中描述着战争=war 对于作者人生产生重大影响，相对于《一个人的战争》之中，虽然标题内有战争的文字，但是内容其实比较接近于“奋斗”(struggle, fight)，与《巨流河》下卷有共同之处。对于女性来说的“战争”，“战争”这个词语，究竟意义为何呢？

齊邦媛女性个人史除了在台湾这片土地上为了安定身心的奋斗以外，同时也全心全意投入结婚、生产、育儿、教育、研究、文化活动等人生要务，而且在各领域都得到优秀的成绩。在这些战争之中作者的方法十分柔软且坚强，得到自己想得到东西时也付出不少代价，某个层面来说也在现实中不得不妥协。

相对于这样齊邦媛，思考着对社会和自己生存的问题而奋斗，林白的情况在同一个面向上较为个人的，看起来更加往自身内部深入。这是戒严令解除后更受瞩目的台湾女性作家们共通之处，但大陆的林白可以说是在 80 年代改革开放以后，谈论个人的风潮之中发展出独自の作风。笔者试图思考她们将自身的奋斗累积命名为“战争”的意义。

はじめに

筆者は 2011 年 6 月に台湾大学名誉教授齊邦媛(せいほうえん、Chi Pang-yuan:1924-)の自伝『巨流河』(作品社)を、2012 年 7 月に大陸の女性作家林白(りんはく、Lin Bai:1958-)の『一個人的戦争』(邦題『たったひとりの戦争』勉誠社)を翻訳出版した。そして 2012 年 11 月には神戸大学で行われた「戦争と女性」と題するシンポジウム⁽¹⁾でこれらに関して基調講演を行う機会をもった。本論は両翻訳書のために筆者が書いたあとがき、解説とシンポジウムの講演原稿を基に再構築したも

のである。「戦争」という言葉をめぐっては、『巨流河』では戦争=warが著者の人生に大きな影響を与えたことを描き、上巻では直接の、下巻では間接的な大きなテーマとなっているのに対し、『たったひとりの戦争』ではタイトルの中に戦争の文字がありながら、内容はむしろstruggle, fightに近く、その意味では『巨流河』の下巻と共通するものがある。女性にとって「戦争」とは、「戦争」という言葉は、どんな意味があるのだろうか。

齊邦媛は台湾という土地への心身ともの定着のための奮闘に併行して、結婚、出産・育児、教育、研究、文化活動などすべてに全力投球し、それぞれにおいて優れた成果をあげてきた。これらの戦いにおける彼女の方法はしなやかでしたたかであるが、得るものも得たかわりに代償も支払わされ、ある意味で折り合いをつけることも余儀なくされた。

こうした齊邦媛の、社会や自己の生存を念頭に置いた奮闘に対し、林白の場合は同じベクトルが個人的で、より自らの身体内部に食い込んでいるように見える。これは1987年の戒厳令解除後いっそう注目されるようになった台湾の女性作家たちとも共通するところであるが、大陸の林白は80年代改革開放後の、個人を語る気運の中で独自の作風を発展させてきたと言える。彼女が自らの奮闘の集積を「戦争」と名付けた意味についても考えたい。

I、齊邦媛著『巨流河』出版の周辺

翻訳書『巨流河』作品社、2011は齊邦媛の『巨流河』台北・天下遠見出版、2009年初版を全訳したものである。原書は写真を含め、600ページの大部なもののため、翻訳に際して当初は抄訳にするという話もあったが、出版社の英断と著者の想いが合致して、全訳ということになった。該書の中華文化圏や台湾における歴史的な意味については、米・ハーヴァード大学教授で齊邦媛の秘蔵っ子である王徳威の文章を解説として収録した。この解説は台湾の著名な詩人覃子豪⁽²⁾の「金色のマスク」の詩の中の言葉を引いて、「かく悲しみ、かく悦び、かく独特に生きる」と題され、王はこの本を「失意の書」と位置付けている。ここでは近現代史、とりわけ日中関係史の中で、最後には台湾に渡り、不本意な人生を歩まざるを得なかった齊邦媛とその父齊世英に想いを致し、『巨流河』の意義についてこう述べている。

『巨流河』は、ひとりの文学者による歴史の証言の書であった。往時を追想する過程で、齊先生は一頁ごとに成長し、最後には老年を迎えることとなった。だがその生き生きとした叙述はわれわれに時間の流れとこの世の盛衰を実感させるとともに、決して老いることのない音色が永遠に響き続けることを教えてくれる。その「高潔」なる音色は、歴史を越え、千年の涙⁽³⁾を越えて、清々しく、情感たっぷりと響き続けるのである⁽⁴⁾

ところで、本書にも登場する台湾大学中国文学科教授柯慶明の日記『2009/柯慶明—生活与書写』爾雅出版、2010 を読むと、本書の出版前後の様子がよくわかる。まずタイトル案についてだが、1月3日の項で言及されている。最初に出ていた『從巨流河到啞海（巨流河から啞海へ）』というタイトル案を、エッセイストとして有名な愛弟子簡嬪⁽⁵⁾の助言により『巨流河』に変え、王徳威と名編集者として知られる胡金倫も賛成したという。柯慶明自身はそれでは唐突というかそっけない気がしたので、齊邦媛のそれまでのエッセイ『千年之涙』『霧漸漸散了的時候（霧がようやく晴れた頃）』のタイトルのそれぞれにおける対のイメージに倣って、『巨流河微波』という案を出したところ、「私は微波【さざ波】ではありません」と齊邦媛本人にきっぱり否定されてしまったとか。柯氏の念頭にあったのはショーロホフの『静かなるドン』の静けさのようだが、いずれにせよ「名は主人に従う」ということで、決着をみたようだ。

原著の初版の奥付は7月7日だが、実際は早めに出版されたのだろう。7月初めから連日のように新聞に関連記事が載っている。雑誌『INK印刻文学生活誌』7月号では早々と著者と政治大学教授陳芳明との対談を掲載した。陳氏は台湾大学大学院歴史研究科に在学中、齊邦媛の「上級英語」の授業を受け、オーウェルの『一九八四年』やハックスリーの「うるわしい新世界」をいっしょに読んだ中のひとりで、80年代にアメリカで台湾独立運動に関わったり、90年代には民進党本部の宣伝部長を務めたりした「政治的」な人物である。齊邦媛は、この本を書いた目的は父親のことを書くことにあり、自分には政治がわかるのだと思ってみると、父親の生涯が理解できるようになると同時に、政治的人物のことが理解できるようになったと述べ、一方、陳氏は、本書は新しい世代、特にいわゆる台湾「本土派」の人に読ませ、台湾社会の今日があるのは、さまざまな人（外省人と本省人とカエスニシティを超えた）たちの共同の成果だということを知らしむべきだ、という意味の発言をしている。

7月17日には出版元の天下遠見出版が新刊書出版記念の茶話会を開催。あらかじめ予定していた2時半から3時半という予定を大幅に過ぎて5時近くになってようやく終わるという盛況ぶりだった。当出版社社長で著名な経済学者である高希均の司会で、黄春明⁽⁶⁾、白先勇⁽⁷⁾、隱地⁽⁸⁾、簡嬪などの有名な作家たちが参加して、それぞれの思いを述べたようで、一部はインターネット上に動画が搭載されている。柯慶明はこの日の日記に、本書の意義と功労は、林文月⁽⁹⁾の『源氏物語』翻訳に匹敵すると称えながら、売れ行きについてはやや悲観的な見込みを述べている。ただし、結局は12月ですでに4万部に達するという、嬉しい見込み違いになった。

9月14日には、台湾で文化関係としては最高の荣誉とされる第5回「總統文化賞」の「文芸賞」受賞が決まり、11月1日に授与式が行われた。その前日10月30日には、かつて奉職した中興大学九十周年式典で、名誉文学博士の学位を授与されている。いずれにせよ、この頃続けざまに、様々な祝賀会が開かれたようだ。

また、記述内容に関する反応もいろいろあり、勘違いによる批判で齊邦媛が右往左往させられるよ

うなこともあったらしい。11月23日から27日まで、前述した王徳威の論文が『中国時報』に掲載された。本人から原稿を送られた柯慶明は、「これは『巨流河』についても最もすばらしい批評で、二世代で肝胆相照らし合っている。さすが君は齊先生の『知音』だ」と賞賛の返事を書いたという。

柯慶明の日記では、12月20日に北京三聯書店から出版する話が出てくるが、それが実現し、簡体字版が出版されたのは2010年10月だ。同年11月4日の『聯合報』の記事によれば、表紙の名前だけは本人の繁体字(旧体字)の署名で通したという。また、主として国民党と共産党の問題に関わる歴史的観点の部分が削除され、原本の25万字から22万字に削られたとか。北京の出版社は台湾文学の発展に関する個所も削除したい意向だったが、齊邦媛の硬い意志によりそのまま残されたということだ。

2009年末には、書店の金石堂が選ぶその年に最も影響力のあった図書十冊の中に村上春樹の『1Q84』などととも選ばれ、齊邦媛が「年度出版風雲人物」賞を獲得した。その後も様々な刊行物やブックフェアで十大名著などに選ばれているようである。

筆者は、日本語訳出版の予定が決まった後の2010年正月、柯慶明の案内で桃園県亀山郷にある保養施設に住む齊邦媛を尋ねた。食事も含めた半日の歓談では、日本人にぜひ読んでほしいという著者の想いがひしひしと伝わってきた。齊邦媛と日本との関わりは複雑だ。中国にあるときは、故郷東北を日本に追われ、さらに日中戦争のために広大な大陸を転々と移動する前半生だった。武漢大学在学中には日本軍の爆撃・進攻で、不安な、また好きな学問を中断された不満不本意の日々を過ごす。極めつけは、恋人の父親は日本軍に虐殺され、恋人自身も抗日戦争の中で犠牲になっていることだ。齊邦媛の心に日本・日本人を憎む気持ちが溢れ、住みついたとしても、不思議はない。

しかし、一方、全編を貫く父齊世英への愛と敬慕の念はやみがたく、父は齊邦媛の誇りであり心の支えであった。その父の人生のかなりの時期は抗日に捧げられたが、その青春期には日本に留学し、特に第四高等学校に通っていた金沢には青春の思い出があったらしい⁽¹⁰⁾。齊邦媛は2002年8月に、その足跡を訪ねて金沢を旅している。彼女が大切にしている父親の遺品の中に、金沢時代に日本人の女性から贈られたという日本刺繍のハンカチがあった。白い絹地に当時の中華民国の旗であった五色旗の図案と、バラのような赤い花が刺してある。彼女の父親はどんな思いで生涯それを持ち続けたのだろうか。そして遺品の中にあつたそれを捨てずに大切に保管していた母。さらにそれを引き継いだ齊邦媛本人。筆者はそれを受け取ってほしいと言われたが、たまたま著書の訳者になったという縁だけでは受け取るには重すぎて、固辞するしかなかった。

英文学者であり大学教授であった齊邦媛は家庭を大事にしながらも、そこから教育者・研究者への道を切り拓いてきた。そのバイタリティと意志の強さは啓発的である。時代や暮らしている社会の事情の違いはあっても、多くの読者、特に女性にとっては、該書の中のたくさんの具体的なエピソードはすこぶる刺激的で、学ぶべきことがたくさんあり、齊邦媛の、悪条件を逃げ口上とすることなく、学問に対しても常に高いレベルを求め続ける姿勢には、ただただ敬服のほかない。

齊邦媛と台湾との関わり方をたどることも、筆者にとっては、台湾文学研究の上での新しい世界の

開拓になった。筆者はそれまで、知識として本省人の歩んだ人生や心情を学び、国民党政府になってから成長した外省人系、本省人系の作家（朱天文⁽¹¹⁾、平路⁽¹²⁾、王禎和⁽¹³⁾など）の作品を単発的に翻訳してきたが、齊邦媛の人生はそれを超えた、あるいは繋げる、あるいは包む視野を新たにもたらしにくれたと言える。

Ⅱ、林白『たったひとりの戦争』について

本書は林白の小説「一个人的战争（一個人的戦争）」および「致命的飛翔」を翻訳したものである。前者は最初、広州の文芸雑誌『花城』1994年第二期に発表された。その後、五度の改訂が行なわれたが、今回の翻訳には作者の希望通り、共和国作家文庫『一个人的战争』作家出版社、2009年版を定本としている。後者の初出は、やはり『花城』の1995年第一期で、今回、底本としたのは『瓶中之水 林白中編小説代表作』春風文芸出版社、2007年版である。

1、林白について

復旦大学教授で現代中国を代表する文芸理論家陳思和をして、「90年代の大陸文壇を騒がせた女性作家のひとり」⁽¹⁴⁾と言わしめた林白の文学について語る前に、その背景となる生い立ちや時代および自然環境などについて、簡単に紹介しておく。

林白は本名を林白薇といい、1958年に広西チワン族自治区北流県で生まれた。「たったひとりの戦争」は自伝的な要素が色濃く、作品中のB鎮は北流（Beiliu）が念頭にあると思われる。1957年の反右派闘争運動の中で右派とされた父は、3歳の時に不遇のうちに亡くなったという。弟がひとりいる。母親は保健婦で、医療機関関係の住宅に住んでいたため、幼児期から医療や出産にかかわる事物が身近にあったことも、作品世界の重要な背景とストーリーの伏線になっている。全寮制の保育園や十歳で母親が再婚するまでの小学生時代の、母が不在の時のひとりの生活などについては、如実に描写されている。

1969年の夏休みから継父の田舎の農村に疎開し、失学の危機を経験するが、林白の才能を見込んだ義姉の機転で、翌年北流県に戻って復学することができた。1975年、高校卒業と同時に農村体験に行き、教師として働く。その頃から詩作を開始した。19歳の時に『広西文芸』投稿に詩を投稿して採用されるが、10編の組詩の中の1編が盗作であったため、その関係筋から話のあった広西映画製作所行きもだめになった。この事件は彼女にとってトラウマとなり、長い間尾を引いた。

1977年、一部の大学入試が復活した際、ちょうど映画製作所行きの話もあって宙ぶらりんな気持ちで受験するが、合格。結局、武漢大学図書館学科に入学できたことが救いになる。1982年、大学卒業後、南寧（作品中のN市に該当）にある広西図書館に配属になり、その後85年（正式には87

年)に広西映画製作所に移った。この間に、小説を書きはじめ、83年に処女作の短編「土壁の家の人たち(土平房里的人們)」を『広西文芸』に発表し、徐々に名前が知られるようになった。1990年に北京に移り、この頃結婚した。1996年まで『中国文化報』に勤め、その後は作家生活に専念、2004年から武漢文連文學院の専任作家となった。現在では北京と武漢両方を拠点に文学活動を続けている。

該書に収録した2作の他に、主な作品としては以下のようなものがあげられる。「黒裙(黒いスカート)(1988)、「同心愛者不能分手(愛する人と別れないで)」(1989)、「子彈穿過蘋果(弾はリンゴを貫いた)」(1990)、「日午」「晩安,舅舅(お休み、おじさん)」(1991)、「回廊之椅」「瓶中之水」(1993)、「猫的激情時代」「青苔」(長編)(1995)、「説吧,房間(部屋よ、語れ)」(長編、1997)、「万物開花」(長編、2003)、「婦人閑聊録」(2004)、『致一九七五』(長編、2007)など。

さて、この間の中国の状況を見ると、彼女の生まれる前年の1957年には反右派闘争の運動が展開され、彼女の父親も打撃を被った。1958年その年は大躍進運動が行われ、農村は集団化されて、人民公社——生産大隊——生産隊という構図になり、それは林白が農村体験をしていた1970年代も続いていた。1960年頃から中ソ対立が激しくなり、国内で1966年に文化大革命が始まった後の1969年3月、珍宝島において中ソ両軍の衝突がおり、両国間の緊張感が高まる。保育園や学生時代の逸話の中に防空壕の話が出てきたり、臨戦体勢下の分散政策で、父の実家に難を避けているのもこの辺の事情が関係していると思われる。

1976年の文化大革命の終結は、18歳の若者たちには大学入学試験復活という形で具現化された。1978年末の三中全大会により改革開放路線が明確になり、彼女のいた広西ではいち早くそれが映画製作に反映され、後に世界的に有名になった陳凱歌や張芸謀などのいた広西映画製作所は「黄色い大地」(1984)など、数々の傑作を生み出した。林白はその黄金期に関わっていたと言える。

風土的な条件について述べるなら、彼女の育った広西は亜熱帯に位置し、言語も広東語系で、北京を中心とする北方系の標準語とは異なっている。シュロ、ヤシ、プリメリア、キワタなどの樹木や花、マンゴー、ライチ、人面果などの珍しい果物、そして鬼門などと名づけられるような自然景観は、いかにも南国的で中国の中でも異国的といえる。それはもちろん生活習慣の違いももたらし、作品の中で語られる風呂の入り方に関するエピソードのように、主人公の人間形成や情操に大きな役割を果たしたといえる。

こうした時代と風土の中で育った林白は、孤独で妄想癖のある、聡明な女の子だった。母親が医療関係者で暮らしていた環境もあってか、幼少期から性に関心をもった。そのことは、彼女の作品に人間や事象を性の視点から見つめるという特質をもたらすとともに、早くから他者との違いに気づかせ自我意識の目覚めを促して、もうひとりの自分(作品の中で、「わたし」と「多米」で表わされている)という感覚を身につけさせた要因のひとつなのではないかと思う。それはさらに映画への熱愛と促し促されるという相互関係をもって、ナルシスティックな独特の審美眼を養ったのではないだろうか。

2、「たったひとりの戦争」について

冒頭で述べたように、「たったひとりの戦争」は1994年に初めて発表された。中国では改革開放政策が軌道に乗ってきた80年代末から90年代にかけて、従来重要視されてきた社会性のある文学が徐々に重みを失い、個人的な書き方が浮上してきた。そうした中でも個人の感性、感覚を前面に押し出した女性文学が盛んになり、クローズアップされた。本作品はそのような中で、陳染（1962-）の『私人生活』（邦訳、関根謙訳『プライベートライフ 私人生活』慶應義塾大学出版会、2008）などとともに典型的な女性による叙述として話題になり、フェミニズム、あるいは同性愛の視点など様々な切り口で語られることが多かった。

実は、この作品が発表された1994年には、中国語圏全体を見わたしても女性作家たちが、話題の作品をたくさん発表している。在米研究者王徳威によって女性作家の「宗家」のように言われる張愛玲（1920-95）の自伝的写真エッセイ集『対照記』が発表されたのはこの年だったし、邱妙津（1969-95）がレズビアンへの苦悩をつづった『鱷魚手記』（邦訳、垂水千恵訳『ある鱷の手記』作品社、2008）、朱天文（1956-）がゲイの男性に仮託して書いた『荒人手記』（拙訳『荒人手記』国書刊行会、2006）、それまで風刺に富んだ社会的作品の短編が多かった平路（1953-）が、孫文と宋慶齡にまつわる物語を女性の視点から書いた『行道天涯—孫文と宋慶齡的愛情故事』（拙訳『天の涯までも—小説・孫文と宋慶齡』風濤社、2003）等々だ。台湾においては、40年近く続いてきた戒厳令が1987年に解除された後、歴史や価値観の見直しが行われた中で女性作家がめざましい活躍ぶりを見せているが、フェミニズム作家として日本でもよく知られている李昂（1952-）が『夫殺し』（邦訳、藤井省三、1993年、JICC出版局）を発表したのは早くも1983年のことだった。ちなみに、北京で女性会議が開催されたのは1995年のことである。

先に紹介したように、林白は10代の終わりから詩作を始め、1983年、広西映画製作所にいた頃から小説を投稿し始めた。多くは自分の人生経験の中のエピソードを、時には中心にすえてストーリーを展開し、またある時には少しだけ盛り込んで、短編や中編の小説として次々に作品化していく。長編小説「たったひとりの戦争」はその時点での総決算とも言える。小説の中で作者が明示しているだけでも、それ以前に発表して話題になった「愛する人とは別れないで（同心愛者不能分手）」（1989）、「日午」（1991）、「回廊の椅子（回廊之椅）」（1993）が下敷きになっており、それ以外にも盛り込まれている逸話は、人名を変えていたりしているものの、いくつかの作品と重複している。

特に「たったひとりの戦争」というタイトルは、長短の逸話や想念を各タイトルにして、たくさんの逸話から編み上げた中編小説「愛する人とは別れないで」の中の一項目のタイトルである。そして、その項目の文章がそっくり本作品のプロローグ、およびエピローグの末尾に採録されていることは読んでみればわかるとおりだ。ちなみにこのタイトルと同様に、本作品の第四章のタイトル「愛は死より残酷」もその中の一項目であり、ともに映画のタイトルから来ている。前者はソ連映画で、原題は「С любимыми не расставайтесь」（仮題「愛する者と別れるなんて」1980）、

後者はドイツ映画の「愛は死より冷たい」(原題「Liebe ist kälter als der Tod」1969)である。林白の映画への思い入れの深さが垣間見える。

「たったひとりの戦争」というタイトルそのものについては、調べが及ばなかったので、著者に尋ねたところ、以下のような返答があった。『たったひとりの戦争』というタイトルには、特別な出典があるわけではない。ただ以前このようなことがあった。ある時、広州の雑誌の女性編集者が南寧まで原稿依頼に来て、私の家で食事をした。サヤインゲンを買ってあったが、いっしょに炒める肉がなかった。すると彼女が『それなら、サヤインゲンにわれとわが身を炒めさせたら!』と言ったのである。このことが『たったひとりの戦争』という言葉の隠れた由来ということができるかもしれない。これまで人に語ったことはないけれど」

この作品を書いた動機や契機については、作者本人が作品の中で何度か言及している。「わたしが映画製作所を辞めてから間もなく、道具置き場はほんとうに大火事にあって焼け、宿舎にあったわたしの日記も灰塵と化した。30歳以前のわたしに関する文字の記録はすべて灰となり煙となって消え、どこにも無くなってしまった。おそらくこの火事こそが、正にわたしがこの小説を書く引き金になったのかもしれない。わたしは自分の前半生を思い起こして、曖昧模糊とした昔の出来事を安全な紙の上に置くつもりだ」(第一章)。「わたしは自分の処女作について、他人に言及されるのは死ぬほど嫌だ。その黒い影がそれほどまでに重苦しいのは、たぶんこれらのことだけでなく、他の事もあるからなのかもしれない。/きっとそうしたことから逃れたいがために、この長編小説を書くことを選んだのにちがいない」(第二章)。

1993~4年は林白にとって、ある種の総括の年だったのかもしれない。

林白については、日本でもすでにいくつかの捉え方が紹介されている。ひとつは陳染と並べて「小説の世界で新時代のフェミニズム文学の旗手と目された」とするもので、林白の文学に男権思想に対する激しい反逆性を見ている⁽¹⁵⁾。また台湾のクイア文学に関する論述や翻訳のある白水紀子は、セクシャル・マイノリティ考察の観点から、林白の同性愛(レズビアン)に関わる小説を「男性への性的な違和感や性愛を含む女性の多様な生き方の追求の例」、すなわち「異性愛中心主義からの脱却の動き」の例として捉えた⁽¹⁶⁾。これに対し、中国の同時代文学として林白の文学を読み続けている伊禮智香子は、「同性愛に重きをおくより、自意識を軸に主人公の閉じた内面世界のありよう、自己愛的色彩に重きをおいて読み解く方が、より林白の作品世界に近い読みができるのではないかと考える」⁽¹⁷⁾と述べている。

中国での研究もフェミニズムをめぐって論じられるものが多く、近年でも西洋のフェミニズムとの違いを論じるもの、マルグリット・デュラスとの対比で論じるものなどさまざまある。訳者である筆者は先にあげた言葉に続く陳思和の論述に共感するところが多かった。陳氏は林白の文学についてこうとらえている。辺境の独特の文化の中で育った林白は中央とは違った独特の価値観や審美眼をもって、ひたすら自己の記憶を頼りに書き続け、普通だったら卑猥とされるような事柄も自らの唯美

主義を貫いて成功させている。それは、逆説的には、辺境から中央（都会）に向かいながら、中央から全面的には受け入れられていないことを表わしている。彼女の特異な価値観や唯美主義は、育った環境が中央から遠く、規範が緩いため自然とそうなったのであって、いわゆる女性叙述もむしろ無自覚的なものであった。しかし書きつづけることにより、個人的自閉的な女性主義から、社会的・自覚的な視点をもつに至っており、その一連の作品として、「たったひとりの戦争」から「危険な飛翔」へ、そして「部屋よ、語れ（説吧，房間）」へという流れがある。陳氏はそう述べる中で、本書にも採られている「危険な飛翔」をその時点での最高傑作としている。

たしかに、すでに 30 年以上におよぶ林白の執筆活動の流れ全体を現在から見ると、初期の個人的な女性の感覚にこだわった叙述から、現在ではより社会的な方向に来ているようだ。2004 年に雑誌『十月』に発表した長編『婦女閑聊録』では、自分以外の女性の記憶を聞きだす側にまわり、記録者、（世間への）伝達者に徹している。また、2007 年の『致一九七五』では、文化大革命後期における高校生の農村体験を等身大に描いて共感を呼んだ。この中では、「たったひとりの戦争」の、とりわけ第二章において五感を使って個人の感覚や視点から描写された事項や人物が、かなり客観的に描かれている。

これらのことを考えると、林白の文学においては、同じエピソードが繰り返し扱われており、彼女の他の作品を読んでいることが、一般的な意味以上に作品理解を深めることになり、一個の作品としての独立性に揺らぎがある。言うなれば、林白にとっての文学とは、彼女の人生の歩み、そしてそれを書きとめること全体が、一個の作品なのかもしれない。つまり、林白という作品まだ完成されていないということだ。

陳思和は先にあげた序文の中で、「北流から北京へ」という構図を脱出すべき辺境と受け入れる中央という形でとらえているが、林白にはそれほどの社会性や政治性はなく、単に感覚的なもののように見える。むしろ「たったひとりの戦争」もそして林白の文学営為そのものも、個人的な感覚から出発した「成長の物語」であるとも言えるのではないだろうか。B 鎮（北流 Beiliu）という中国南方の汽車もない辺鄙な田舎町で育った聡明で早熟なひとりの少女が、成長に連れて N（南寧）市へ、W（武漢）市へ、北京へと、人生という空を覆っていた幕を切り裂くように行動と視野を拡大していき、やがてその視点をもって逆流し、故郷へ、自己へと見詰め直す過程でもあるからだ。そして結果的には、農村体験の皮膚感覚を伴う描写などによって、無自覚のうちに時代の証人ともなっているのである。

3、翻訳について

作品の中に、主人公が執筆の際に感覚を研ぎ澄ますために、肌が直接空気に触れるよう工夫する場面があるが、ブルーストについても同様な逸話を読んだ記憶がある。本作品はブルーストではないが、まさに「失われた時を求めて」記憶をまさぐり、意識の流れに沿って、記憶の時間も随意に移っていく。第一章「鏡の中の光」は幼児期からの記憶をもとに、特に性にまつわる事柄を記している。第二

章「東風吹いて」は高校卒業後の農村体験を中心に、自身の創作歴の出発点であった詩作およびそれに関わる事件を、文化大革命末期の農村における知識青年の置かれた状況とからめて、かなり詳細な告白に経緯を語っている。起承転結の転に当たる第三章は、場面を非日常である旅行中の出来事に移し、母との確執や性体験のエピソードとからめて話を展開している。第四章は執筆当時、記憶もまだ新しい映画製作所関係者に対する大失恋事件について詳しく語っており、この体験が一連の「女性書写」に影響を与えたであろうことも想像できる。だいたい作者の履歴に対応しているようであるが、意識の流れにしたがっているので時間しばしば前後する。いずれにせよ、前述したように、プロローグとエピローグの末尾が以前の作品「愛する人と別れないで」からの引用の同じ文章で、自慰行為を暗示する叙述となっていて、この長篇小説全体がその行為による精神的作用であるかのようにも受け取ることができ、きわめてナルシスティックであるとも言える。ちなみに、中国で物議をかもし、またこの作品の改訂をくり返したのは、このプロローグの部分を入れるかどうかということも大きな理由であったようだ。

本書の叙述の特徴は、語り手の「我（わたし）」とそれと同一人物と思われる「多米」が登場し、自我がふたりの間を行き来し、もちろんそこには彼女たちを操る作者がいる。全体として「わたし」による一人称語りなのにもかかわらず、第一章、第二章では「多米」という「わたし」の分身が設定され、必要に応じて客観描写されながらも、「わたし」と同等の扱われ方をしている。第三章では「大学卒の女の子」あるいは「ひとり旅の女の子」という客観的表現があって、やや客観化され、「わたし」は彼女の言動などについて論評はしているがやはり「多米」は登場する。第四章はほとんど「わたし」による一人称語りに終始していることからすると、「多米」による自己分化は自我の未成熟を表象し、それらを後年の成長した視点で表わすための手段なのであろうか。この点でも、この小説は一種の「成長の物語」であることが言えるかもしれない。

叙述の技術的な特徴としては、客観描写文と頭の中に浮かぶ想念や感覚を表出させた文章を、同じ平面上に句点で繋ぎつけてかなりの行数に渡らせ、そのままひとつの段落としているケースが多いことだ。一文は想念としてはそれで完結しているものを次々に書きとめているので、多くはそれぞれで切ってもよいのかもしれないが、接続詞の類もほとんどなく、結果的に切り方が読者（訳者）に委ねられているため、様々に解釈できる。因果関係なのか、時間的経過なのか、不明のケースも多く、どこで切るかによってニュアンスが変わってしまう。結果的に、読むごとに理解が変わることもあり得る、すべてを一文ずつに切るという方法もあるが、作者の意識は連続しているのであろうから、それも忍びなく、結局、日本語としての読みやすさなども考えて、個別に対処せざるをえなかった。というわけで、この翻訳書は、これも一般的な意味合い以上に、訳者によるひとつの解釈として読んでもらうしかないと思う。

もうひとつ、会話と地の文の問題がある。ふつうなら引用符に収めるべき会話も、現実描写や妄想や意識の流れなどととも同一平面に並べられているので、本訳でも引用符を用いなかった。場面に

よっては「～と言った」という表現が多く、読みにくいところもあるかもしれないと思ったが、原作を尊重した。さらに、意識の流れの手法の特徴として、作者（語り手）はひとつの言葉の作るイメージに敏感に反応し、次々に勝手に連想して行って、読む側にとっては唐突な感が否めない個所もある。訳者が親切にそれを補うというスタンスもあるのかもしれないが、本訳については最小限にとどめた。

林白および彼女の文学に関する研究や翻訳には、以下のようなものがある。伊禮智香子「回廊の椅子（原題：回廊之椅）」『季刊中国現代小説』第二卷十二号、通巻第四十八号、1999、七原載、田畑佐和子・原善編『現代中国女性文学傑作選』②、鼎書房、2001、9 再録。「猫の激情時代（猫的激情時代）」『季刊中国現代小説』第二卷十九号通巻第五五号、2001。「瓶の中の水（瓶中之水）」『季刊中国現代小説』第二卷三十六号、通巻第六十二号、2005。また伊禮氏には、「林白論・自己凝視の世界——『瓶の中の水』を読み解く」南雲智編著『中国現代女性作家群像 人間であることを求めて』論創社、2008、7 所収その他がある。翻訳はこの他に、大西紀「銀角へ行けば（去往銀角）」『火鍋子』第六十六号、2005年12月がある。

Ⅲ 「戦争」と女性——齋邦媛と林白の場合

「戦争」という言葉は一般には英語の war に対応して理解され、神戸大学でのシンポジウムでの発表もそのような前提の上に、戦争が人間とりわけ女性にもたらす苦しみ、痛み、不幸について論じられるか、あるいはそれらを特に女性の作家たちがどのように文字化・文学化しているかということについて語られるケースが多かった⁽¹⁸⁾。

ところで、筆者は齋邦媛の『巨流河』の日本語の翻訳作業においては、後半の部分、すなわち齋邦媛が台湾に渡ってから以降の部分を担当した。周知のとおり、該書、そして齋邦媛の激動の人生の根本には「戦争」＝日中戦争にあり、前半ではその苦難の詳細が臨場感を持って語られている。

後半の台湾における生活では、直接いわゆる war に直面することこそなかったが、齋女史の人生（生活）は決して安穩としたものではなかった。彼女は戦い続けていた。Struggle し、fight していたのである。まずは台湾という馴染みのない土地と風土に慣れるために周囲と戦い、そして何よりそのままそこに定住することになった運命を受け入れるために、自らの内面と戦った。そうして結婚、育児など、多くの女性と同じように、人生における奮闘期を経験する。齋邦媛はその間にも、さらに若い頃目指した英文学研究や教育事業への情熱を消し去ることなく、一步一步実現に向かって地道な歩みを続けた。台中一中、静宜大学……台湾大学とたどり、その時々最善を尽くし、最高の努力を行って、成果をあげてきた。その間、家族を残してのアメリカ留学や故宮博物院、国立編訳館での対外的折衝における粘り強さ、誠実な態度と惜しみない努力には、ただただ敬服するのみである。

こうした事実やそこに関わる齋邦媛の感情を追いながら翻訳する過程で、筆者がもっとも感動した

のは、女史はけっして「女だから…」「家庭があって、育児や家事の負担が大きいから…」「他にもたくさん用事があるから…」等々、我々が日ごろ口にしがちな言い訳を決して口にせず、その事業において最高のものを求めて奮闘しつづけたことである。このような姿勢は、似たような状況の中でもがいている女性たちにとって啓発的で深い意味をもつものと思う。

筆者は意図せずして『巨流河』の翻訳の後、大陸の女性作家林白の「たったひとりの戦争」という中長編小説を翻訳する機会を得た。このタイトルの中には「戦争」という言葉が使われている。しかし、実は小説の中では主人公（1958年生まれの作者の分身的存在）が直接戦争に関わることはほとんどなく、また間接的に登場する中ソの戦闘やベトナム戦争などを念頭において、「戦争」という言葉をタイトルに盛り込んでいるわけではなさそうだ。結局、これは本論の「II-3」で述べた作品内容が参考になろう。

つまり、実際の war 体験のない作者は自らの生存のための struggle を「戦争」と名付けたようなのである。ある意味では、女性の struggle は war に匹敵するとも言えるのかもしれない。齊邦媛は直接の war 体験があまりにも深刻なために、struggle に対して「戦争」と名付けることはしなかった。台湾での生活の中で、struggle に見合うような事実はたくさん紹介されているが、それに対応して「戦争」あるいはそれに近い用語の使用はほとんど見られない。齊邦媛にとって、生存に関わる war がもたらす不条理な傷や痛みと比べれば、struggle や fight はまったく個人的で、ある意味では個人の努力や力で何とかできるもの（すべきもの）という前提があったのではないだろうか？

これについては、歴史的背景のほかに、世代背景による感覚の違いも考えられ、ある意味では日本でもあり得る。例えば、筆者世代は、戦後すぐに農村地帯で生まれ、日本社会の価値観、特にそこで女性の在り方の変化を雰囲気として知っており、齊邦媛と共通する記憶や認識をもち、彼女ほど完璧ではないが、奮闘とそれに見合わない社会的見返り（家庭の問題も含めて）について実感もある。女性が家庭を営むこと以外の生きがい追求することが当たり前ようになり、不十分とはいえ、法律や社会の環境も整いつつある現在では、なぜそんなことに心身を消耗させなければいけないのかという疑問もあるだろうが、日本でも中国でも台湾でも、とにかく現在に至るまでに、確かに女性たちが通ってきた道なのである。

それでは齊邦媛のような戦争がもたらす過酷な体験もなく、個人的な struggle を「戦争」と呼んだ林白は誇大妄想的で、考えが甘いのだろうか？ 中国では一部の批評家が、この作品を書いた頃の林白は女性主義文学の代表的存在のひとりとして批判の矢面に立たされることが多く、それらとの対応は彼女にとって「戦争」であったと言える述べている。当時の彼女がこの作品によってそれまでの総括を行うにあたり、「戦争」という言葉を含むタイトルにしたのは戦闘服の意味もあったのだろう。しかしまた、この作品の中で、作者が主人公を「我」と「多米」という人物に分散させているのを見ると、戦う相手というのはもっと内在的なもの、たとえば自我の確立というようなことだったのではないだろうか。社会主義社会の集団生活の中で育ち、自我を放棄することを余儀なくされて育っ

た内省的な魂は、猥雑なかまびすしい社会の中で、自我を保つことそのものが、戦争であったのだとも言える。聡明で早熟で、育った環境（彼女の母親は医療従事者で、彼女達は関連の宿舎に住んでいた）のために早く芽生えすぎた性への関心は、彼女の中に幼いうちから自分は他者とは違うという感覚を養った。歴史条件の外的規制により発露を失ったその魂は、いくつかの分身を並列させたまま、社会生活に合わせていく。やがて改革開放政策が軌道に乗ってきた 80 年代末から 90 年代にかけて、従来重要視されてきた社会性のある文学が徐々に重みを失い、個人的な書き方が浮上してきた。規範の枠の周縁にあるとも言える江西の地で、野放図にはびこり分散した自我は、書くことに捌け口を見出し、こうした時代状況の中で花開き、その野放図さが逆に個性となったとも解釈できる。ちなみに 1987 年に戒厳令が解除された台湾でも、女性主義文学の隆盛について似たような構図が見られることは、神戸大学におけるシンポジウムの参加者もよく知っていることであった。

繰り返しになるが、80 年代、90 年代の中国で、林白の個性は時には周囲との摩擦を生み、本人が「戦争」と呼びたくなるような戦意高揚が必要であったことであろう。しかし、それは子供の時から続けてきた「内戦」から比べれば、比較的わかりやすい、目に見えやすいものだったに違いない。彼女が表題の由来について、「サヤインゲンにわれとわが身を炒めさせたら！」と言う理由はそこにあり、ここでの「戦争」は自らの内なる帝国を相手とするものだったのかもしれない。

国家間の戦争は人類とりわけ女性に大きな苦痛を与え、悲劇をもたらす。このことは視覚的にも確認できる。しかし、一個の人間存在にとっては自己の内面との戦い・戦争もあり得る。それは人間が社会的存在である以上、内戦（内部だけの戦争）では済まされず、戦闘は社会性を帯びざるを得なくなって、社会で抑圧された位置にいる女性の内面戦争による傷はいつそう深くなる。筆者は、偶然ではあるが、自己の外と内に向かう、両方向の女性の戦いについての叙述を翻訳する機会に恵まれて、訳者という以上に、女性あるいは人間として大きな啓示を受ける機会を得たことを幸運に思ったことであった。

注

- (1) 神戸大学シンポジウム「戦争と女性 漂泊する叙事——1940 年代中華圏における文化接触史」主催：科研費基盤研究 B「漂泊する叙事——1940 年代中華圏における文化接触史」/台湾・財団法人自由思想学術基金会 /神戸大学、2012 年 11 月 10 日～11 日開催。
- (2) 覃子豪（1912-1963）四川省生まれ。1930 年代に日本留学。台湾に渡った後、1953 年に藍星詩社を組織した。詩集『海洋詩抄』『向日葵』などが有名。
- (3) 齊邦媛には『千年之涙』という、王徳威の勧めで出版したエッセイ集がある。
- (4) 齊邦媛著、池上貞子・神谷まり子訳『巨流河』上下、作品社、2011、下巻 p 309
- (5) 簡媜（1961・）宜蘭県冬山郷生まれ。台湾大学中国語文学科卒業後、『聯合文学』などの編集にも関わる。身辺を題材にした秀逸なエッセイストとして知られる。

- (6) 黄春明 (1939-) 宜蘭県羅東鎮生まれ。郷土文学の代表的作家とされる。作品は「さようなら・再見」「坊やの人形」「銅鑼」など日本語訳も多い。
- (7) 白先勇 (1937-) 広西省桂林生まれ。父親は国民党の有名な将軍、白崇禧。1960年代に渡米。以後、在米中国語作家として活躍。台湾大学外国文学科在学中に彼が中心となって学友たちと創刊した『現代文学』は戦後台湾を代表する雑誌として、大きな影響をもつ。代表作は台北人シリーズとニューヨーカーシリーズがあり、そのうちのかなりの作品や長編『孽子』(邦題『罪の子』)などが日本語に翻訳されている。
- (8) 隱地 (1939-) 浙江省永華生まれ。小説、評論、散文などを書く作家である。
- (9) 林文月 (1933-) 上海生まれ。原籍は台湾。台湾大学中国文学科卒。同教授。日本文学に造詣が深く、『源氏物語』『枕草子』その他日本の古典、近代文学の翻訳も多い。またエッセイストとしても知られる。
- (10) 神戸大学のシンポジウムでも、金沢大学の杉村安畿子による「金沢第四高等学校における齊世英」という報告があった。
- (11) 朱天文 (1956-) 高雄鳳山生まれ。父親は山東省出身の作家朱西寧、母親は台湾苗立出身の日本文学翻訳家劉慕沙。妹朱天心も作家である。著名な映画監督侯孝賢の脚本家としても知られる。思春期に張愛玲の夫であった胡蘭成と交流があり、拙訳もある『荒人手記』(国書刊行会、2006)は彼へのオマージュだという評もある。
- (12) 平路 (1953-) 高雄生まれ。原籍は山東。台湾大学心理学科を卒業後、アメリカに留学。卒業後もアメリカで就職、1990年代に台湾に戻った。在米中に創作を開始。初期には実験的、社会的な作品も多かったが、現在は女性主義的視点の作品が多い。拙訳は『天の涯までも—小説・孫文と宋慶齡』風濤社、2003、『何日君再来—いつの日きみ帰る ある大スターの死』同、2004など。
- (13) 王禎和 (1940-90) 花蓮生まれ。台湾大学外国語文学科在学中に『現代文学』に参加。西洋文学の技法と郷土文学の精神を結合させていると言われる。筆者による翻訳は代表作「鹿港から来た男」「シャングリラ」(共に、山口守編訳『鹿港から来た男』国書刊行会、2001所収)など。
- (14) 陳思和「林白論(代序)」林白著『林白作品自選集』漓江出版社、1999
- (15) 銭鴉「新時代の女性文学」関西中国女性史研究会編『中国女性史入門 女たちの今と昔』人文書院、2005。
- (16) 白水紀子「セクシャル・マイノリティ」同上。
- (17) 伊禮智香子「林白論・自己凝視の世界——『瓶の中の水』を読み解く」南雲智編著『中国現代女性作家群像 人間であることを求めて』論創社、2008。
- (18) 例えば、「植民地とジェンダー」のセッションでは、台湾の研究者が以下のような報告を行なった。劉靈均(中国文化大学)「軍艦の性別——安西冬衛の戦前詩における「女」軍艦と「男」性叙事者」、陳儒修(政治大学)「戦争における女性と『大きな物語』の崩壊」